神奈川大学　FD NEWS LETTER

FD NEWS LETTER

Faculty Development

No.33

2022

全教職員と全学生に感謝を、そしてコロナ後へ

教育支援センター副所長　中村 壽宏

もうこれで３年目となりますが、もうしばらくコロナウィルス感染症対策を踏まえた授業運営を続けなければならないようです。一昨年にいわゆる遠隔授業を導入した緊急対策を採ったときは、教員も学生もまったく準備が整わないまま手探りで授業を進めるしかありませんでした。振り返ってみれば、確かに反省点は多いのですが、それほど大きな破綻はなかったと思われます。ひとえに、教職員のみなさまの前向きな努力の結果であると思います。

もちろん、華やかなキャンパスライフに期待をしていた学生たちを想えば、その期待に添えなかったことはほんとうに残念です。ですが、遠隔授業にかかるアンケートの結果を見れば、多くの学生がこの緊急対策にきちんと順応し、それなりに成果を上げてきていることがわかります。学生たちにも頭が下がる思いです。

これに対して、現在の各大学の努力を不当に評価し、大学を悪者に仕立てて社会をあおり立てる一部のマスコミ報道には、頭にくるというより哀れみを、あるいは報道という一種の権力の凋落ぶりに背筋が寒くなります。ある新聞の先日の社説では、大学を掛け持ちする非常勤講師に授業を担当させることと「教育レベルの低下を招く懸念」を結びつけるような主張が見られました。私たちは、非常勤の先生方も、この状況に対応するために最大限の努力を払い、教育の質を維持するためにどのような方法をとれば良いか常に模索し続けてくれて頂いていたことを知っています。このような悪意に満ちた報道によって世論がある種の誤解に導かれ、「大学は努力していない」とか「遠隔授業のビデオなど見る価値もない」とか、状況の一部分だけしか見ていないヒステリックな主張がまかり通るのは、とても悲しいことです。

とはいえ、そんな世論の誤解を消し去るためには、私たちがきちんと日々の授業を行い、学生たちにその学修に見合った成果が生じれば良いだけですし、それ以外の方法はないと思われます。そろそろコロナウィルス感染症対策の長いトンネルを抜けて、もうすぐ通常のキャンパスの賑わいが帰ってくることを期待する時期ですが、ここで「コロナ以前の教育方法」に戻ってはいけないと思っています。わたしたちは、人類史に残る苦難の時期を乗り越えつつありますが、ここで得た知見・経験を基盤として、新しい「コロナ後の教育方法」を確立することが、誤解に満ちた社会に対する我々の回答となるだろうと信じているからです。

Contents

1 全教職員と全学生に感謝を、そしてコロナ後へ
2 2021年度各学部等のFD活動について
3 2021年度 第2回FD研修会 ～オンデマンド授業を理解する～開催報告
4 2021年度 第7回ヨコハマFDフォーラム
5 神大トークセッション 2021～学生による意見交換会～
6 「コンピュータ科学」「コースワークⅢ」でのKUISを用いた遠隔授業実施報告
7 教育支援センターの学習相談状況
8 2021年度 教育支援センター（FD・学生支援推進委員会）活動報告

2021年度各学部等のFD活動について

法学部

法学部 FD 委員会委員長　井上　匡子

本委員会は、法学部の教育プログラム（専攻科目の他、本学部提供の共通教養科目などの授業を含む）の充実や教員（非常勤講師含む）の教育力の向上を目指し、組織的な取り組みを行うことさらに、さまざまなFD活動を通じて、各教員が教育内容の方法について互いに関心を持ち合うことを目的としている。

2021年度は、コロナ禍の中、遠隔二年度目を迎え、遠隔による講義・演習などの実習の進め方や、試験・評価の実施について様々な試みが展開されるとともに、新たな課題であるハイフレックス型の講義にも取り組んだ一年であった。

また本年度は、新カリキュラムの初年度にあたることから、新規科目や旧来の科目であってもFYSのように実施方法を刷新した科目、新しいプログラム（GPP）などについて、教員間で情報を共有しつつ、内容を豊富なものにしていくことを目指し活動した。具体的には、昨年度はコロナ禍への対応に時間を割かれほとんど取り上げることのできなかったFYSや初年次教育のありかた、大人数授業での客観評価の問題、質的保証に関する議論などの懸案事項についても、積極的に取り組むことを目指した。

以上諸課題のうち、FYSに関しては、「初年次演習科目検討部会」を設け、来年度からの実施に向けて、これまでの議論をまとめると同時に、7月教授会にて、今後の方向性について報告書を提出した。初年次教育に関する残りの問題については、次年度の課題としたい。

大人数授業での客観評価の問題に関しては、具体的な形での取り組みはできなかった。教育の質的保証やその基準に関しては、今年度実施された外部評価（実地調査）との関係でも、学部執行部より問題提起や提案がなされたが、未だ学部全体での議論とはなっていない。

法学部では、大学院との共同でのFD活動に関しても、柱の1つとしてきたところであるが、今年度は、大学院が実施している共通科目・スキル系の科目についての試みについて、学部教育との関係を整理し、議論を深めるためのFD懇談会を計画したが、諸般の事情により実施できなかった。次年度以降の課題としたい。

(1) 法学部FD委員会　4回実施

本年度の課題の整理
部会の設置についての検討
FD懇談会の開催検討・実施など
自己点検・外部評価委員会との共同作業
大学院FD委員会との連絡・協同

(2) 初年次演習科目検討部会

FD委員会以外の教員数名を部会員として選任し、問題点を確認するとともに、次年度からの実践のための報告書をまとめた（7月教授会で報告）。打ち合わせも含めて6回程度の部会を実施し、比較的少人数で詰めた議論をすると同時に、報告書提出の前には、FD懇談会を開催し、広く学部内の意見を聴取する機会（次項参照）を設けた。

(3) FD懇談会など

1）第一回 学部/大学院FD懇談会

2021年6月19日 16時30分～18時　Zoomミーティング（社会連携室）

初年次演習科目検討部会の検討結果を報告するとともに、教員間での活発な意見交換を実施した。ここでの議論を踏まえ、報告書をまとめた。

2）非常勤講師との意見交換会（学部執行部主催）

年度末に開催予定であったが、コロナ禍の状況から中止となった。

経済学部

経済学部 FD 委員会委員長　森田　圭亮

本年度における主要な取り組みの1つとして2度開催された学部FDワークショップが挙げられる。このワークショップは経済学部戦略策定委員会と連携して学部の今後のFD活動のあり方について検討することを目的としている。以下、各ワークショップの概要について記載する。

[第1回ワークショップ（7月28日）]

森田圭亮学部FD委員により「DXを活用した大学教育の高度化に関する事例報告」というタイトルで、2021年6月19日に行われた全国私立大学FD連携フォーラムにおけるシンポジウムの内容が報告された。とくに、関西大学、東洋大学、法政大学の取り組みなどが取り上げられた。

ワークショップの議論において、学部独自でポートフォリオを分析をすること自体は可能だが、各部署で個別のデータベースを保有しているため、入学から卒業までのサポート体制を組むには各部署の情報を提供しやすい体制とシステムの構築が必要であるという指摘があった。

[第2回ワークショップ（11月24日）]

第1報告では大滝英生学部FD委員により「『e-learning』で教える」というタイトルで、e-learningについての定義や歴史的変遷に触れつつ、LMSを活用する上では評価のあり方が重要であることが示された。また、教育効果を考える上では、同期性の有無・集合性の有無や双方向性の有無に注意をする必要があるという見解が示された。第2報告では、五嶋陽子学部FD委員により「e-learningの事例―明治大学の場合（ユビキタス教育）―」というタイトルで、明治大学で取り組まれているユビキタス（あらゆるところに同時に存在すること）をコンセプトとしたe-learningの取り組みが紹介された。明治大学では、上記コンセプトのもとで、教員だけでなくリエゾンやチューター、デザイナー、コンテンツスペシャリストなどからなる組織で教材を開発・提供しているという。第3報告では、中西勇人学部FD委員により「熊本大学における入門系大規模授業の例の紹介」というタイトルで、松葉（2016）に基づく事例研究紹介が行われた[1]。とくに、熊本大学で行われているLMSとシラバスの連携や自動採点テストの活用の意義や課題が紹介された。

ワークショップの議論を通じて、e-learningを積極導入する際には、まず講義の形態がe-learningに向いているかどうかや、e-learningを用いた際の評価方法を確立できるのかなどを慎重に検討する必要があるという指摘があった。また、放送大学などが配信するサービスと明確な差別化が求められるという指摘もあった。

以上のワークショップから得られた課題や成果を踏まえて、次年度以降、さらに学部のFD活動の改善に努めていきたい。

1 松葉隆一，(2016) 学習管理システムを活用した大規模授業運用，『大学におけるeラーニング活用実践集』，ナカシヤ出版

経営学部

経営学部 FD 委員会委員長　嶋谷　誠司

経営学部では2021年度FD活動方針（目的、目標）として、2020年度の積み残しも含めて、以下のような4つを掲げた。

（1）経営学部における遠隔授業の現状と課題の確認では、授業が遠隔授業となり、教員は慣れない準備作業や機器操作に加えて実施上の様々な課題に対応し、ある問題は解決し、またある問題は解決をあきらめるなどの経験をしてきたことと推察される。そこでこの内容を共有することで、今後も起こり得るこうした状況でも、より高いレベルで対応で

きる教員への質的向上を図ることとした。

(2)非常勤講師懇談会の実施(上記 (1)のテーマ併用が好ましい。)では、経営学部の教育・研究活動の多くを依存する非常勤講師の先生方と共に学部の教育力の向上に資する講演や研修会を実施し、非常勤講師の先生方が普段どんな問題を抱えどのような課題を感じているかを共有する機会として、専任教員との親睦を深める懇談の場を設けることとした。

(3)FD研修会の実施では、目前の課題として、2021年4月1日からの新学期がスムーズにスタートできるよう、みなとみらいキャンパス校舎の具体的利用方法のイメージを共有しようとした。例えば、校舎各階平面図を見ながら、授業人数規模とそれに見合った教室サイズの場所、出来れば時間割上の教室配置案などを事務局から説明頂き、自分の動線と学生の動線等のイメージシミュレーションを持つことで、初日からの物理的混乱を回避することにつなげることを目的とした。

(4)授業アンケートの組織的な活用では、教員の授業能力向上を目的として、授業アンケートの結果を分析し、より良い教育実践の方法を追究することとした。

2021年度では、2020年度で教員各自が授業アンケートを確認するに留まっていたが、学部FD研修会として、特に4年生アンケート結果を中心に共通理解を得ることができた。

また、みなとみらいキャンパスへの移転後、今までに無い概念の図書館の有効利用、発展的利用方法の共通理解を得られる研修会は実施できた。「館」でも「室」でもない物理的特徴をどのように理解し使用することが可能なのか、を図書館関係者より教示頂く事が出来、教員が学生に対して、具体的な利用方法を提案したり助言や気配りの方法を示すことが出来るようになった。

遠隔授業の方法について、他の教科の先生方がどのように工夫し試行錯誤してきたかの実例を開示していただき、様々の面から参考になったと学部内評価を確認した。その事は今後の全ての授業の質的向上につながるものになったと推察される。

本原稿作成時点では未実施であるが、昨年の新入生(2021年度1年生)のアンケート調査を振り返って、2022年度につなげようとするFD研修会を予定している。

経営学部では、今後のFD活動をより一層充実させ、こうした活動を継続すると共に、研究・教育活動の充実に向けた様々の準備や新たな授業内容の改善に向けた取り組みを行っていきたい。

外国語学部

外国語学部FD委員会委員長　新木　秀和

外国語学部では、学部共通の学修支援活動を行ったことに加え、以下のとおり4学科個々の特徴に応じたFD活動を実施した。

＜英語英文学科＞

1. 新旧カリキュラムへの対応

旧カリ最終年となる次年度に向けて科目調整などの準備を行った。

2. 教員の授業改善に関する取り組み

(1)専任・非常勤講師合同の科目打ち合わせ会を12月4日に開催し、IES/GECの各プログラムのカリキュラムと教育目標を全体会で再確認した。科目別分科会では、遠隔対応も含め授業運営に関わる問題と改善の施策について意見交換を行った。(2)年間を通じ、Slackで意見交換を継続的に行った。(3)英語科目の外部委託業者と緊密に連携し、学修状況、試験実施、学習到達度を随時確認した。学期ごとの中間報告会と期末報告会兼成績判定会議で問題点と改善案を協議し、成績不振学生と個別面談を行った。(4)IESとGECの乗り入れ可能科目を明確にした。(5)学修成果の可視化に向けた協議を行った。(6)成績不振学生に対し、9月20日～30日に一対一の学修相談会を行った。(7)一部科目のGPCAの平準化に向けて準備を行った。(8)新カリキュラムの専門基礎科目開講数減の問題について科目の増設で対応した。(9)次年度、履修登録後に授業形態(遠隔/対面)変更にならないよう一部科目で人数制限を行った。(10)次年度からの3年生のライティング科目の到達目標と評価基準を統一し、担当者に周知した。

3. 学生の課外活動に関する取り組み

(1)English Expressの出席を英語スキル科目の一部とし、学生の積極的な参加を促した。(2)第20回English Speech & Presentation Contestが11月13日に米田吉盛記念ホールで開催された。プレゼンターとして個人7名、グループ1組が参加し、教員が指導を行った。当日は、スタッフ、関係教員、審査員が社会的距離を取って集合し、Zoomによる同時配信を行い、1年生全員が視聴した。終了後、動画を編集してYouTubeで公開した。(3)SEA2ではサリー大学との協定書の更改を進め、学生向けの説明会を開催した。(4)2021年度神奈川大学 SDGsアワードへの応募を促した。(5)GECプログラム2年生のオンライン留学をサポートした。

＜スペイン語学科＞

1. 授業改善に関する取り組み

(1)新カリキュラムの進展にともない、学科会議や他の機会に専任教員間で情報を交換しつつ、授業の効果的な運営・改善や時間割について検討を続けた。(2)授業の運営・改善について、非常勤講師を含む教員間で、メールやZoom等による情報・意見交換を行い、担当科目や学年ごとに成績の平準化について討議した。その一環として、3月3日にオンライン教員懇親会を開催した。(3)留学プログラムの参加者に対する履修指導を継続し、3月に事前ガイダンスを行う。また、同プログラムの現地研修参加者予定者には3月に出発前ガイダンスを実施する予定である。(4)4月5日と10月1日に2年生向けの履修ガイダンスおよびコース制説明会をそれぞれ実施し、指導を徹底した。

2. 学生の課外活動に関する取り組み

(1)6月24日、スペイン語スピーチコンテストをオンライン開催した。(2)教員指導のもと10月から12月にかけて、学生によるスペイン語劇ドニャ・ペルフェクタを無観客で録画し、その後編集した。今後、録画を閲覧できる機会を設ける予定である。(3)12月4日、就職懇談会をオンライン開催し、就職活動を控える在校生が、内定を受けた4年生や卒業生から体験やアドバイスなどを聞ける機会を設けた。(4)Spanish Expressをオンラインおよび対面で実施して、学生のスペイン語学修に対する支援・指導を継続した。(5)スペイン語検定(DELE、西検)受験への組織的支援を続けた。(6)セビーリャ(スペイン)の語学学校で日本語を学ぶ学生たちとの、Zoomを用いたインテルカンビオ(交流会)を試験的に実施した。今後、これを継続・発展させていく予定である。

＜中国語学科＞

1. 入試関連の改善措置について

(1)昨年度の入試方針の改定(共通テスト入試の「中国語」科目導入)を踏まえ、今年度は推薦指定校の評定平均値の調整や推薦校の精選など入試関連の改善措置を引き続き検討した。(2)推薦入学者に対する入学前指導方法の改訂を行い、読書感想文提出のほかに、小論文提出とその添削実施の追加など課題内容とチェック方法を見直した。

2. 授業改善及びカリキュラム改訂の取り組みについて

(1)定例の学科会議においてカリキュラムの実施状況を確認し、授業運営の問題点や改善方法などについて協議した。(2)オンラインによる非常勤講師との打ち合わせ会議(12月17日)を開催し、対面・遠隔授業の運営方法や留意点などについて意見交換、情報共有を図った。(3)卒業年次・進級年次の学生を対象に成績判定会議(2月2日)を開催し、学習到達度や取得単位数などの確認を行い、学修指導を徹底した。(4)教育環境の改善策として、中国語学術論文データベースCNKI(語言・文字)とArityLibrary(人文)を導入したほか、中国語教育にかかわる映像資料の収集を行い、みなとみらい図書館での学生による映像資料利用のサービス向上を促進した。(5)授業内ゲストスピーカーを招き、中国に関するメ

ディアリテラシーの向上、学びと社会との接点を探究した。(6)「卒論執筆要綱」を見直し、今後1～3年生に対する卒論中間発表への聴講参加を呼びかけ、長期的な取り組みとして学生の卒論研究への意識向上を図る方策を模索した。

3. 学科主催の行事および課外活動について

(1)学生主体の活動として、就職懇談会(6月23日と30日)、卒論中間報告会(7月16日)、卒論口頭試問(1月27日、28日)などを行い、昨年度コロナ禍により中止を余儀なくされた中国語能力試験HSK(12月5日)を再開したほか、スピーチコンテスト(1月31日)もオンラインで再開した。(2)課外活動としての中国語補習Chinese Expressは今年度「初級中国語」「中上級中国語」「台湾華語」という3つのクラスを設けて実施したが、活動の形態や方法などについて、今後さらに改善していくことを検討した。

＜国際文化交流学科＞

国際文化交流学科では、国際日本学部の国際文化交流学科と合同で以下の活動を行った。

1. 教員と学生のための講演会活動

学科内の観光文化コース(6月30日)、言語・メディアコース(10月7日)、国際日本学コース(11月24日)、文化交流コース(1月21日)主催によるそれぞれのミニ・シンポジウムを開催した。

2. 学生の学修状況改善に関する取り組み

学修活動に配慮が必要とされる学生が遠隔授業体制においても学修を継続できるようにするため、教員と教育支援センターとの間で学修環境の改善を検討し、実践した。

3. 学生の課外活動に関する取り組み

学生委員を中心に学部祭として一連のBunkademy Awards、多文化フェスタ(10月27日)、文化の祭典(11月30日)、の3つのイベントを企画し、学生が学習成果を発表した。今年度は会場だけでなく、Zoomでの参加も可能になるよう配慮し、合計で350名以上が参加した。

4. 教員の授業改善に関する取り組み

英語教育部会主催によるワークショップ「コロナ禍における英語遠隔授業の実践:オンデマンド、リアルタイム、そしてハイフレックス」を2022年2月25日(金)13時～15時 Zoomにて開催した。

国際日本学部

国際日本学部FD委員会委員長　大島　希巳江

国際日本学部では、昨年度に引き続き各三学科(国際文化交流学科、日本文化学科、歴史民俗学科)が協力し、それぞれの特殊な事情を考慮したオンライン授業、対面授業、Zoomなどによる会議、その他各種活動をできるだけ円滑に行えるよう配慮した。

1. 入学前教育課題

推薦入試合格者に対して実施している入学前教育課題の改訂を行った。

2. 学修相談会およびガイダンス

年度初めに1年生および2年生を対象としてそれぞれガイダンスと学修相談会を行った。必修科目や履修登録に関するアドバイスや、個別にガイダンスが必要な学生への対応をした。また、学科交歓会(Freshman Orientation Camp)を開催し、各学科主任やコース代表者からの説明、新キャンパスの案内、学部祭などの学生活動などについての紹介などを行い、学生と教員の親睦の時間を作った。

3. 教員と学生のための講演会活動など

国際文化交流学科では、4つのコース(観光文化コース、言語メディアコース、国際日本学コース、文化交流コース)によるそれぞれのミニ・シンポジウムを開催した。

―観光文化コース主催「銭湯から見る都市横浜のあゆみ～幕末維新から平成時代まで～」(講師:吉田律人/横浜都市発展記念館調査研究員) 開催日時6月30日(水)15:20～17:00が対面とZoomによって開催された。

―言語・メディアコース主催「学ぶ楽しみ伝える喜び～番組制作の経験を通して」(講師:山田智子/ラジオ・テレビ番組ディレクター) 開催日時10月7日(木)17:10～18:50が対面とZoomによって開催された。

―国際日本学コース主催「What Can Japan Teach us about Global Disability Studies? Lessons to Learn from the Perspective of an Overseas Wheelchair User(日本から学ぶ国際障害学－海を渡った車いすユーザーの視点から)」(講師:マーク・ブックマン/東京カレッジポストドクトラル フェロー) 開催日時11月24日(水)15:30～17:00が対面とZoomによって開催された。

―文化交流コース主催「移民・難民と欧州ポピュリズム－日本の少子高齢化を考える」(講師:羽場久美子/本学教授) 開催日時2022年1月21日(金)が対面とZoomによって開催された。

4. 学生の課外活動に関する取り組み

今年度は外国語学部国際文化交流学科と国際日本学部の三学科合同で学部祭を開催した。学生が中心となってBunkademy Awards(動画投稿)、多文化フェスタ、文化の祭典、の3つのイベントを企画し、それぞれ盛況となった。学生の普段の学習成果を発表する場としてよい機会であり、教職員にとってもそれを目にすることができた。Bunkademy Awardは8月から12月までの募集期間に投稿された作品に対して投票によって優秀賞、最優秀賞が決定した。多文化フェスタは10月27日(水)に開催され、ゲスト講師を招いて「笑い」をテーマに講演会を行った。文化の祭典は11月30日(火)に米田吉盛記念講堂で開催、多くの出場者が多言語による歌や英語落語、麦殿大明神の発表などを行い、大いに盛り上がった。今年度については会場だけでなく、Zoomでの参加も可能になるよう配慮した。これら一連のイベントは合計で350名以上の参加者を集め、大変に有意義な活動となった。

写真:「文化の祭典」出場者と受賞者、および運営委員の集合写真

5. 教員の授業改善に関する取り組み

英語教育部会主催によるワークショップ「コロナ禍における英語遠隔授業の実践:オンデマンド、リアルタイム、そしてハイフレックス」が2022年2月25日(金)13時～15時 Zoomによって開催された。参加者は主に専任教員、非常勤教員とした。発表希望者を募集し、数名による発表を行った。今年度遠隔授業をどのように実践してきたのか、実例を共有し来年度以降の遠隔および対面授業の改善に役立てるようワークショップを開催した。その後意見交換の機会も設けた。

人間科学部

人間科学部FD委員会委員長　衣笠　竜太

人間科学部は2006年の学部開設から10年以上が経過し、社会の変化や要請、公認心理師資格への対応、保護者や生徒・学生のニーズなどを踏まえた見直しを行っている。

まず、2019年度より学部改革の一定の方向性を示す新たなカリキュラムを開始した。人間科学部では、スポーツ健康コースを中心にして

中学校・高等学校の「保健体育」の教科に関する科目を、人間社会コースを中心にして中学校の「社会」および高等学校の「地理歴史」「公民」の教科に関する科目を提供しているが、2015年の中央教育審議会による答申を踏まえ、教職課程のみならず学部全体のカリキュラム改訂を行った。具体的には、近年のICTを活用した指導法の必要性や新しい教育内容への対応を踏まえた科目の新設、教職課程に関わる質向上・保証のための非常勤講師から専任教員への科目担当者の変更、アクティブ・ラーニングを取り入れるための複数教員による科目担当への切り替えなどを行った。

心理発達コースでは、2020年度より公認心理師への対応のための新たなカリキュラムを開始した。公認心理師については他大学が先行しており、その影響のためか近年、大学院人間科学研究科臨床心理分野の志願者数が減少傾向にあった。こうしたことを踏まえて今回のカリキュラムの改訂を行った。今年度は、教育の質向上にかかる諸政策として、コース教員間で意見交換をすると共に、それに関する教員アンケートをコース独自に実施した。

人間社会コースでは、フレックス授業についての情報共有を活発に実施し、学生の支援を考慮した授業経営の議論を活発に行った。

スポーツ健康コースでは、担当する共通教養科目の課題と展望について、議論を行った。具体的には、コマ数の適正化、みなとみらいキャンパスとの共同運営科目の運営方法、共通テキストの作成、コロナ禍対応について、検討を進めた。

一方、心理発達コース、スポーツ健康コース、人間社会コース、教職課程部会の教員により構成される将来構想検討委員会において、各コース・部会の現状や課題を共有するとともに、2023年もしくは2024年度の実現を目指した人間科学部の新機軸及び将来構想について検討を行っている。今年度は、学部創設時からの課題であった「人間科学研究所（仮称）」の設置に向け、研究所の理念や指針に基づく予算配置などについて議論を行った。

理学部

理学部 FD 委員会委員長　川東　健

本年度はコロナ禍の影響を受けつつも対面授業が実施され、ポスト・コロナの大学教育を模索する年度となった。理学部は2023年に横浜キャンパスへの移転を控え、湘南ひらつかキャンパスに理学部だけが残る形態で２年間を過ごさなければならない。横浜移転までの期間に、教員の配置変更によるカリキュラム再編成、教育、研究に必要な設備や機器装置の移転計画、在学生と受験生への移転の周知と対応などの移転にともなう具体的な準備を粛々と進めているが、さらには理学部の一学科化や、情報学部・化学生命学部の新設など新体制への対応を迫られる慌ただしい年度となった。ポスト・コロナを見据えた教育・研究活動、組織運営、社会貢献活動にわたるFD諸活動を徐々に再開していくことを模索した1年でもあった。

本年度におけるFD活動の大きな動きとしては、未だ収まらぬコロナ禍の対応として、対面授業とZoomによる配信もしくは収録動画によるハイフレックス授業への対応であった。新LMSであるWebClassは旧LMSのdotCampusより強化されたサーバにより授業収録動画を活用しやすい環境になったとも言える。また全教室にZoom対応のWebカメラとPCが設置され、各教員ともその活用に苦労しつつも徐々に対応していった。

理学部談話会も授業同様ハイフレックス形式で継続され、今後も当分はこの形式を取らざるを得ないであろう。各学科の卒業研究発表会は対面及び一部ハイフレックス形式で実施され、新たな生活様式に沿った形態に変化しつつある。3月には退職教員の最終講義が実施される予定である。

ポスト・コロナを見据えた現状での新たな教育形式を模索し、ハイフレックス授業の質の確保などを議論していくのが次年度以降の課題である。

工学部

工学部 FD 委員会委員長　石井　信明

昨年度に引き続き今年度も、実験・実習などの一部の科目を除く多くの科目が遠隔で行われた。工学部では、昨年度の経験も生かし、遠隔授業の良さを取り入れながら授業を行うとともに、FD活動の継続、ならびに外部組織のFD活動にもアンテナを張り、効果的なFD活動を実施した。

1. 今年度の工学部FD活動方針

今年度も、これまで各学科・教室で実施している研究授業を継続することにした。なお、研究授業の成果は、BOXのFD関連フォルダに保管し、工学部教員間での情報の共有化を継続することにした。
また学部FD活動予算の使用方法について、FDフォーラム等への参加費用に充てることとした。

2. 研究授業の実施

今年度の研究授業は、各学科・教室により、遠隔での実施と対面での実施に分かれた。

たとえば、電気電子情報工学科の講義科目「パワーエレクトロニクス基礎」の研究授業は対面で行われた。授業には５名の教員が参加し、資料提示の方法、進行の速度など、参考になる多くの事柄について共有することができた。オンデマンド型式で実施した経営工学科の講義科目「経営数学」では、動画ファイルを教員に1週間公開する方法で意見を募った。その結果、動画１本あたりの時間、話す速度、課題の提示方法、演習課題のテーマなど、貴重な意見が得られた。またオンタイム型による建築学科の実験・実習系科目「力と形」では、レポート作成にあたっての資料の作成方法への配慮、実験動画を活用することの利点など、有用な知見が得られた。

依然として制約の多い中であったが、このように各学科・教室とも、昨年度の遠隔授業の経験を取り入れながら、教育目標を達成するための創意工夫をし、効果的な教育を実践したと言える。今年度のＦＤ活動で得られた知見は、今後の工学教育を再考する上で貴重な内容であり、教員間での共有を行っていく。

3. 来年度に向けて

新たな時代の工学教育の実践に向け、FD活動への取り組みはますます重要度を増すと考える。教育現場でICT化が進む現在、遠隔授業の良い面を工学教育に取り入れることは、時代の求める方向とも言える。これまでのFD活動における経験と知見を生かし、各学科・教室ではあらたな教育方法の試みも行われている。FD委員会では、より進化した教育のありかたを創造することを目指し、活発なFD活動を推し進める。

大学院

大学院学務委員会委員　篠森　大輔

今年度の大学院学務委員会では、「2020年度学習環境満足度調査」の結果が審議された。この調査は、学修環境に関する院生のニーズを正しく把握し、これをカリキュラム編成と学生指導の参考にすることを目的として、09年度より隔年で実施されている。今回の調査（第6回）は20年12月から21年1月にかけて、WeBSt@tionのアンケート機能を利用して行われた。この調査の結果をめぐる所感を記しておきたい。

(1) 今回の調査では、新型コロナウイルス蔓延に関連する指摘が多く寄せられた。過酷な環境で研究を続ける院生たちの悲鳴の現れであろう。調査から約1年が経過した現在は、遠隔授業自体への戸惑いや入構制限への不満など、ある程度改善されたと思われる事項も多い。しかし、引き続き最大限の支援を要するのはいうまでもない。なお、社会全体が遠隔授業を経験したことは、コロナ後の大学院のあり方、特に社会人リカレントに大きな影響を与える可能性があることを想定しておきたい。

(2) 上記(1)以外の点では、おおむね学生の満足が得られたようにみえる。

しかしこの調査にも限界はある。①調査の回収率が低い（92件、在籍者の21%）ことは、調査結果の信頼性に関わる。②理工系院生の回答が全体の65%（60件）を占めることや、社会人特別入試進学者の回答がわずか3件であることは、調査結果を読む際に注意を要する。③学費・奨学金、時間割、ハラスメントなどの諸問題は、この調査の対象ではないが、いずれも院生の学修環境の前提問題を形成していることを確認しておきたい。

(3) この調査は基礎データの収集にすぎない。調査をきっかけにして積極的な大学院FDにつなげたいものである。大学院の抱える問題は各研究科によって大きく異なるので、筆者が所属する法学研究科を例にとろう。

院生数の減少に悩む法学研究科は、22年度、社会人院生と留学生の獲得に力を入れる方針をあらためて打ち出し、まずは入試・進学説明会に力を入れることにした。そこで直ちに明らかになったのは、本格的に彼らを受け入れる体制の脆弱さであった。具体的には、学費・奨学金などのハード面から、勧誘方法（修士論文を書く意義の説明、具体的な院生生活の提示の仕方など）、指導の方法、院生コミュニティ、留学生サポート体制などのソフト面まであらゆる点に及ぶ。このこと自体は、従来「専業院生」が主に想定されていたので、やむをえない面がある。大切なのは、新たな試みを進めるにあたり所属教員の知恵を結集する仕組みである。大学院FDは上手く利用すれば、その「場」になりうるように思われる。従前、積極的には行われていなかった大学院FDが、各研究科の工夫によりさまざまな形で、岐路に立つ大学院の活性化に寄与することを期待する。

2021年度 第2回FD研修会 ～オンデマンド授業を理解する～ 開催報告

日　時：2021年12月1日（水）13:30～14:45
会　場：Zoomミーティング（※後日オンデマンド動画を配信）
主　催：教育支援センター、遠隔授業対策本部
参加者：80名（専任教員60名、非常勤講師8名、職員12名）

2021年度の授業は、可能な限り面接（対面）授業を実施するとしたうえで、新型コロナウイルス感染防止対策をとりながら、各授業科目に応じて、面接（対面）授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリット型授業の実施を行いました。特にオンデマンド授業においては資料や課題の提示のみでなく、学生のリアクションを得ることや教員からのフィードバックを行うなど、双方向的なやり取りやツールの工夫といった施策の必要性が浮き彫りとなりました。今回は2022年度の授業に向けて、これまでの経験を活かしつつ、遠隔授業における「同時性又は即応性を持つ双方向性（対話性）」について理解し、教育の質の維持・向上を目指すための研修会を行いました。

事例実践報告

報告1

「予習動画とレジュメの提供＋オンタイム収録＋授業動画の公開と復習テストの提供」

教育支援センター副所長（法学部教授）　中村 壽宏

オンライン・オンデマンド授業にて、予習・復習・レジュメ提供・授業動画・リアルタイム授業・課題までを複数のシステム等を用いてトータルデザインした授業例について説明されました。学生に教材を提供することはもちろんのこと、教材作成のための準備や公開・締め切り期間まで実際に使用されたシステムの紹介や画面を基に、詳細にわかりやすく示し、各部分においても参考事例となればと発表されました。

報告2

「オンライン・オンデマンド授業で扱うツール紹介 ―反省と要望を添えて―」

理学部准教授　東海林 竜也

授業にて使用したツールについて、PC周辺機器のハードからオンデマンド動画の編集の方法やソフトまで、実例を交えた報告をされました。中には「画面に向かって相手の反応なく、話していくのは大変であること」や「話すスピード・間違えてしまった際の取り直し」など、動画作成の際に苦労した点を含めており、それを打開するためのツールや設定も紹介され、同じ苦労のある教職員の方に少しでも負担軽減になればと発表されました。

最後に、今回の研修会を通して、遠隔授業における授業準備・実施の実態や工夫について、教職員の共有や理解が深まる時間となりました。今後も教育支援センターではFD研修会を充実させ、本学の継続的なFD活動を推進いたします。

（教育支援センター　山口　諒）

2021年度 第７回ヨコハマFDフォーラム
『大学における教養教育を、今一度、考える』開催報告

日　時：2021年12月4日(土) 13:00～16:30
会　場：Zoom ミーティング
主　催：神奈川大学 / 関東学院大学 / 横浜国立大学 / 横浜市立大学
趣　旨：新型コロナウイルス感染症の影響による全面的なオンライン授業の経験により、オンライン授業の利点と課題が浮き彫りになってきました。中でも、座学式の大人数クラスが多い教養教育科目については、動画等によるオンデマンド型授業で良いのではないか、という声が聞かれますが、安易なオンデマンド化は、大学の存在意義がなくなる恐れを孕んでいます。様々な種類・形態の授業も含め、今後の教養教育の「あり方」や「実施方法」等について学生を交えて議論しながら、ウィズ&ポストコロナ時代の大学教育のあるべき姿について考えました。
開会挨拶・フォーラムの趣旨説明：
谷地 弘安（横浜国立大学理事（教育・情報担当）・副学長）　安野 舞子（横浜国立大学）

【第１部】
教職員と学生による実践報告
―横浜４大学の教養教育の現状と今後の展望

大学ごとに教養科目の位置づけや運用についての紹介とオンライン・オンデマンド授業等を併用した具体例について教員・学生それぞれからの視点で発表報告されました。

神奈川大学

「ポストコロナ時代の大学教養教育 ―オンライン英語授業の有効性：教員の視点から」
白石 万紀子（副学長、共通教養教育センター所長、経営学部教授）

共通教養科目の位置づけや授業形態について、今年度大学で実施した遠隔授業・ハイフレックス型に関するアンケート結果を交えた報告の後、自身担当の英語科目について、MOOCSを利用したオンデマンド教材の視聴とオンラインでのディスカッション、最後にFormsでの小テストを用いた反転授業の実践例を報告されました。今後の共通教養科目においては、21世紀型地球市民スキルやGlobal Competenceを身に着けるための教育の導入を目指し、授業形態は同時性・即応性を持つ双方向型の対応を行うとともに、遠隔・対面をより良く合わせた授業形態を検討していくとまとめました。

「オンライン英語授業の有効性：学生の視点から」
小原 晶奈（理学部3年）

実際に授業を受けての感想とオンライン授業のメリットデメリットを述べました。特に、オンライン授業を受講する中で「参加感」と「理解度」をキーワードとし、「参加感」については授業内の教員や学生間のコミュニケーションの有無や濃淡によって実感が得られるかどうかが重要であるとのこと。「理解度」においては小テストやリアクションペーパーに対するフィードバックを得ることで、対面授業で実感するコミュニケーションの代替として、自身の理解度を図る指標になると報告しました。

関東学院大学

「関東学院大学の事例紹介」
奥 聡一郎（学長補佐（グローバル化推進担当）、建築・環境学部共通科目教授）

大学教育全体と関東学院大学における共通教養教育の位置づけについて説明をされ、関東学院大学内では「共通科目」として教養科目・外国語科目・健康スポーツ科目は各学部に属するように科目配置を行い、専門課程との連携できる体制を整えていると紹介されました。また、今後の展開として、実用的な内容のみではない未来志向の教養科目を交えていくことで、生涯にわたって学ぶ姿勢・学ぶ方法（読書力・情報収集力・発信力など）を「協働、共創」を通して育めるようにしていきたいとの発表されました。

「教員養成のための大学教育の在り方について」
比護 翼（理工学部4年）

関東学院大学の教職課程では、全学共通の組織・共通カリキュラムで運営された教員養成が行われており、その中で教養教育と課程途中の教職課程を交えて、コロナ禍に伴うオンライン授業を経た感想と展望を報告されました。教職課程の授業においてもレポートのみで完了する授業も多かったことから「実践的な学びの機会が減少してしまったことが残念でした」という感想の半面、コロナ禍の影響もあるため、模擬授業等の実践と知識理解における授業との住み分けやバランスが保たれることが学生としては望ましいですと発表されました。

横浜国立大学

「横浜国立大学の教養教育（全学教育）の現状」
松本 真哉（高大接続・全学教育推進センター副センター長、環境情報研究院教授）

横浜国立大学では、平成29年度に大学教育システムを改革し、教養教育・専門教育という枠組みの廃止や大学・大学院一体型の科目ナンバリングを導入することで、学部生による大学院科目の先取り履修も可能としていると説明されました。また、高年次履修システムを導入し、3年次以降に4単位以上教育科目の履修を定め、1・2年次中心の履修から、4年間一貫の履修方向にシフトしたと報告されました。

「学生から視た横浜国立大学の教養教育（全学教育）」

大澤 理夏子（経営学部３年）、**伊藤 太一**（理工学部４年）、**齋藤 柊**（都市科学部４年）

大学教育システムの改革を経て、学生の立場から教養科目についてどのように感じたのかを松本先生とのインタビュー形式で発表されました。

Q1：**教養系科目の必要性についてはどう思いますか。**

A1：「様々な分野の学問に触れられるはとても良い」「教養科目においても、各学問分野の科目に絞ることなく、学問分野と学問分野の間を繋ぐような科目があると良い（例：教育学×哲学など）」「授業によっては、資料を提示するのみの授業やレポート評価のみの授業があり、内容や授業方式にばらつきがある。特にレポート評価のみの授業に履修者の偏りが出やすく、本来その科目の履修を希望している人が、履修の抽選で落ちてしまうため、授業方式を含めた統一を求めたい」等の回答をされました。

Q2：**履修の科目種類は多い方が良いですか。また、高年次履修システムはどうですか。**

A2：「様々な分野を学べるのは良い。また、学年が上がり、学部科目等の知識を得た上で教養科目を取ると理解がしやすくとてもよかった」と回答され、最後に先生より、学生の直の意見を聞く貴重な機会となったとまとめました。

横浜市立大学

「横浜市立大学における共通教養の概要及び実践事例」

本多 尚（共通教養長、理学部教授）、**平井 美佳**（副共通教養長、国際教養学部准教授）

横浜市立大学における共通教養科目の位置づけや運用について説明をされました。共通教養科目は「問題提起科目群」「技法の修得科目群」「専門との連携科目群」の３つの柱に分け、専門教育に入る前に幅広い学問分野に触れることを目的に運用をされています。従来の語学や基礎ゼミ・各分野の入門科目に加え、データサイエンスに関する科目も複数組み込まれているとのこと。また、データサイエンスの素養を認証するプログラムも今年度より開始し、未来志向を高めていくと述べました。

「横浜市立大学１年次のゼミ科目を受講して」

東山 賢一（国際教養学部１年）、**平野 萌香**（国際教養学部１年）

共通教養科目の中でも基礎ゼミ・教養ゼミ・多文化交流ゼミを履修しての意見や感想を述べられました。基礎ゼミ・教養ゼミでは、大学での学び方や自分が興味のあるテーマのクラスを受講する中で、「グループワークや個人での研究・発表準備等を通して周囲とのコミュニケーションを図りながら学ぶことができました。また、多文化交流ゼミでは、ゼミテーマをすべて英語でやり取りすることにより、周囲とのコミュニケーションに加えて、英語自体を学ぶのではなく、英語を１つのツールとしてテーマ内容を学べる良い機会になりました」と報告されました。

【第２部】意見交換会

参加した教員・職員・学生を交えたグループで、第１部の内容を軸に意見交換を行いました。また、最後に来年度幹事校の横浜市立大学よりご挨拶があり、今年度のフォーラムを閉会しました。

（教育支援センター　山口 諒）

神大トークセッション 2021 ～学生による意見交換会～

（2021年12月13日（月）開催：横浜キャンパス）

教育支援センターにて活動を支援している「学生UD（University Development）委員会」主催の意見交換会「神大トークセッション2021」を開催しました。

本企画は、2015年度から継続して開催しておりましたが、昨年は新型コロナウイルス感染拡大のため実施することが出来ませんでした。今年度は「学生の交流の場を作り、大学について話したい」というUD委員会の学生の熱い想いがあり、実現しました。

今回は11名の学生が参加し、第一部・第二部のテーマに沿ってグループワーク・発表を行いました。

第一部のグループワークでは、「みんなが考える理想の大学生活」というテーマで「卒業するまでにやりたいこと」「大学で憧れていること」などを学部・学年の垣根を越えて楽しく共有し、実現に向けて何が必要かを考え、発表を行いました。

第二部のグループワークでは「コロナ禍での大学生活」というテーマで、主にコロナ禍の遠隔授業について良かった点や現状の課題、今後の改善案などを再考しました。発表では「ブレイクアウトルームの機能を使った授業がやりやすかった」「チャット機能は質問がしやすかった」とコロナ禍だからこそ実感した意見や「２人１組で取り組む課題を導入することで学生同士の交流の場を作ることが可能」など学生独自の意見が挙がりました。

教育支援センターでは、今後も学生UD委員会の主体的な取組みを支援し、学生参画型のFD活動を推進してまいります。

- **日　　時**：2021年12月13日（月）　17:30～19:30
- **場　　所**：横浜キャンパス 3号館 307講義室
- **参 加 者**：11名
- **主　　催**：学生UD委員会
- **イベント名**：神大トーーーク交流会
  ―他学部・他学年の人とつながろう！―
- **プログラム**：【一部】グループワーク①・発表
  テーマ：「みんなが考える理想の大学生活」
  【二部】グループワーク②・発表
  テーマ：「コロナ禍での大学生活」

「コンピュータ科学」「コースワークⅢ」でのKUISを用いた遠隔授業実施報告

工学部 准教授　内田　智史

1．授業で配布する資料に対する索引の重要性

授業でパワーポイントや各種資料をPDFなどで配布する機会は、遠隔授業の拡大などにより多くなりました。しかし、いざ、このような資料を使って学生が復習をしようとすると、どこに何が記述されているか、すぐに分からず学習が進まないことがよくあります。そこで、我々の研究室では、索引を簡単に作成することのできるシステムKUIS（神奈川大学索引システム、Kanagawa University Index System）を開発いたしました。実用的に使えるようになりましたので、公開することにいたしました。

筆者も大学の授業用として、2021年前期に「コンピュータ科学」、「コースワークIII」の資料の索引を学生に公開いたしました。これらの索引は、毎回の授業の復習や試験対策に役に立ちました。以下のURLにアクセスして頂くと当該授業の索引ページが表示されます。

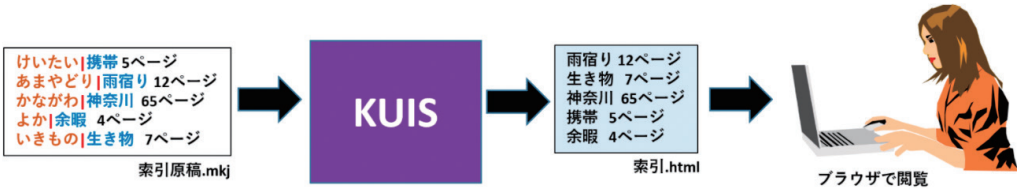
コンピュータ科学：http://www.officeuchida.com/ku/cp.html
コースワークIII：http://www.officeuchida.com/ku/cw3.html

索引は、単なるページの表記だけでなく、「10月15日配布資料52ページ」のように詳しい指定ができるので、学生にとっては分かりやい記述になっています。また、授業が終了した後にその授業で配布した資料の索引情報を簡単に追加できるようになっており、教員の負担も軽減されております。授業のFDの取り組みに十分貢献すると考えています。

2．KUIS（神奈川大学索引システム）とは

KUISは、索引を自動的に作成するシステムです。

次の図に示すように、ある索引に対して、「読み」、「索引」、「ページ」の 情報を記述したファイル（以下の例では「索引原稿.mkj」）を筆者が作成し、それをKUISに処理させると、自動的に索引を生成し、それをブラウザで見ることができるようになります。



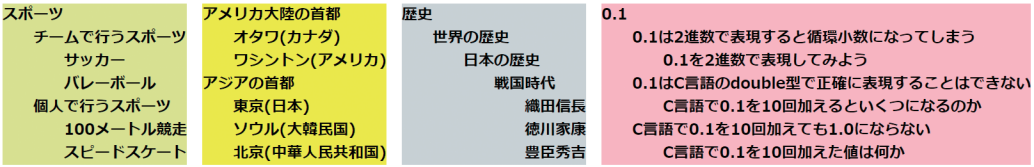
このようにKUISは、学生に配る予定のワード文書、パワーポイント、PDFなどの索引を手軽に作れるので、学生の教育（予習や復習）に役立つと期待しています。

しかし、KUISでは、ページ番号を手作業で入力しなければならないので、ページの挿入削除が頻繁にある時点ではKUISは使えません。KUISは、原稿の執筆が完成してページの挿入削除がなくなった文書に対して使うことができます。

KUISは、Windows10･11およびMacOSで動作可能です。

3. KUISの特徴

KUISの大きな特徴は、階層的な索引を簡単に定義できることです。階層的な索引とは、次のようなものです。



このような階層的な索引を提供することによって、知識を構造化することができます。この構造化される索引を読むだけでも、全体構造を把握し、読者の知識を向上させることが可能になると我々は考えております。学生にとっても、このような情報が公開されることは、勉強の成果に寄与すると考えております。

また、MathJaxに対応しているので右のように数式を表示することもできます。

なお、文字の色を変えたり、ルビを振ったり、下線を引いたりすることもできます。ファイルはUnicodeで記述するので、様々な国の文字が使えます。

数式(その7) 小さい表記方法：$\sum_{k=1}^{n}(a_k+b_k)=\sum_{k=1}^{n}a_k+\sum_{k=1}^{n}b_k$　222

数式(その8) 大きい表記方法：$\sum_{k=1}^{n}(a_k+b_k)=\sum_{k=1}^{n}a_k+\sum_{k=1}^{n}b_k$　222

数式(その9) 小さい表記方法：$\int f(x)dx$　222

数式(その10) 大きい表記方法：$\int f(x)dx$　222

数式(その11) 大きい表記方法 行列：$\begin{pmatrix}1&2\\3&4\\5&6\end{pmatrix}$　222

4. KUISのご利用について

KUISのWebページには、KUISの概要の説明、ダウンロード、インストール、KUISマニュアルのダウンロード、関係先へのリンクなどが記載されております。また、利用に対する注意事項も記載されておりますので、御一読ください。

http://www.officeuchida.com/ku/KUIS.html

内田智史（さとし） 連絡先
内線　3738（神奈川大学 045-481-5661）
メールアドレス　s-uchida@jindai.jp
研究室　23号館4階431室

5. ご質問･ご要望について

ご質問、ご要望は、内田智史までお願いします。できる限りのお手伝いを致します。

教育支援センターの学習相談状況

教育支援センターでは、大学での学習を進める上で基礎となる英語、数学、文章表現について教育経験の豊富な学習相談員（元高等学校教諭）が基礎・基本から「日常的継続的な学習支援」を実施しています。
また、高等学校までの学習に不安がある学生だけでなく意欲的、主体的に自分の力を発展させたいという学生の相談も対応しています。

2021年４月～ 2022年１月学習相談状況

学部	教科	相談学生数(総数)					相談学生数(実人数)				
		1年	2年	3年	4年	合計	1年	2年	3年	4年	合計
法学部	英語		10			10	4	3	3		10
	数学		3	1		4					
	文章表現	19		13		32					
経済学部	英語	16		1	47	64	6	3	7	7	23
	数学	6	3	8	1	18					
	文章表現	2		1	4	7					
人間科学部	英語	37	24			61	4	1		1	6
	数学	3			1	4					
	文章表現					0					
工学部	英語	48	12		5	65	12	5	1	3	21
	数学	23	3	1	5	32					
	文章表現	5			1	6					
工学研究科	英語	8				8	1				1
	数学	1				1					
	文章表現					0					
英語　計		109	46	1	52	208					
数学　計		33	9	10	7	59					
文章表現　計		26	0	14	5	45					
2021年度 横浜キャンパス 計		168	55	25	64	312	27	12	11	11	61
2020年度 横浜キャンパス 計		11	5	8	29	53	4	2	3	2	11
理学部	英語	3	13			16	8	5	4	1	18
	数学	18		24	2	44					
	文章表現	2	16	15		33					
英語　計		3	13	0	0	16					
数学　計		18	0	24	2	44					
文章表現　計		2	16	15	0	33					
2021年度 湘南ひらつかキャンパス 計		23	29	39	2	93	8	5	4	1	18
2020年度 湘南ひらつかキャンパス 計		9	10	0	13	32	1	1	0	2	4
経営学部	英語	36				36	4			2	6
	数学				10	10					
	文章表現				12	12					
外国語学部	英語	2	10			12	2	1			3
	数学					0					
	文章表現	3				3					
国際日本学部	英語					0		2			2
	数学		3			3					
	文章表現		1			1					
英語　計		38	10	0	0	48					
数学　計		0	3	0	10	13					
文章表現　計		3	1	0	12	16					
2021年度 みなとみらいキャンパス 計		41	14	0	22	77	6	3	0	2	11
2021年度　合計		232	98	64	88	482	41	20	15	14	90
2020年度 合計		20	15	8	42	85	5	3	3	4	15

※2020年度は9月～1月までの利用者数を示す(4月～7月は非実施)
※みなとみらいキャンパスの数学の学習相談は、横浜または湘南ひらつかキャンパスの学習相談を利用。

学生が利用しやすい学習相談を目指して

本学の学習相談では新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、多様化する授業形態に合わせた学習の場の提供を行っております。その結果、受講する場面のニーズに合わせ、対面での相談に加えてオンライン相談を併用することで、多くの学生が利用しました。

学習相談を利用した学生からの声

- 自分では理解できない問題があったが、学習相談を利用して解けるようになった。
- 一人では苦手で続けることが難しい科目も、モチベーションを保ちながら学習することが出来た。
- 先生のアドバイス通り勉強を進めた結果、TOEIC®の点数が50点上がった。
- 個別授業なので、発音の間違いなどをその場で指摘していただけたのが良かった。

学習相談では「大学での学修の仕方が分からない」「高校での基礎学習を今一度勉強したい」という利用者以外にも、「TOEIC®や検定、就職活動のために学習能力を向上させたい」と考えている方の利用が増えております。今後も教育支援センターでは、継続した学びの機会の提供を行ってまいります。

2021年度　教育支援センター（FD・学生支援推進委員会）活動報告

Ⅰ. FD 活動

1. 2021年度「教育改善のための学生による調査アンケート」の実施

［調査期間］
前学期　2021年 7月 2日（金）～15日（木）
夏　季　2021年 8月17日（火）～9月24日（金）
後学期　2021年12月20日（月）～2022年1月22日（土）

今年度より、従来のマークシート方式からウェブ方式に変更し、科目ごとの集計結果を迅速にフィードバックすることが可能になった。また、設問ごとのクロス集計や過年度科目との比較分析もできるようにシステムを構築した。アンケート結果の組織的な活用として、全学、各学部学科及び教育実施組織ごとにアンケート結果を集計し図表化した。

2. 2021年度「遠隔授業・ハイフレックス型授業に関する調査アンケート」の実施

［調査期間］2021年7月15日（木）～26日（月）

2021年度から新たに導入した「ハイフレックス型授業」の課題をはじめ、学内で面接（対面）授業や遠隔授業を受講する際の課題に焦点を当て前学期に実施した。集計結果は、各学部等のFD（授業改善）に活用するとともに、FD研修会及びホームページを通じて学内外に報告した。

3.「2021年度学修状況調査」の実施

［対象年次］1～4年次
［実施時期］4月～5月（＊4年次のみ9月に実施）

就職支援部が実施するアセスメント「GPS-Academic」（1～3年次対象）に、FD・学生支援推進委員会が設定した独自設問を追加してアンケート調査を4月に実施し、集計結果に基づき総合的に分析を行った。さらに、2021年度から9月に4年次も対象に加えて実施した。本調査の位置づけとしては、外部アセスメントテストを利用した①汎用的能力の「思考力」と「姿勢・態度」のスコア測定、②学生自身による自己評価の多面的な測定、これらを通じた学生の学修成果を可視化することにあり、集計結果及び分析については各学部におけるFD活動にも活用する。2021年度の調査結果は12月の各学部教授会にて報告を行った。

4. FD 研修会の実施

（1）新任教員対象 FD 研修会

① 第1回新任教員対象 FD 研修会
日　時：2021年4月1日（木）～4月15日（木）
開　催：オンデマンド研修
講　師：副学長　山本 博史
教育支援センター所長　髙城　玲
内　容：（1）神奈川大学の基本方針等及び学修進路について
（2）FD 活動及び学生支援について

② 第2回新任教員対象 FD 研修会
日　時：2021年5月26日（水）15:00～17:30
出席者：12名
講　師：（1）本学の研究費について
研究支援部研究支援課長　風間 優子
（2）本学の学修について
教務部副部長　岩畑 貴弘
（3）TA・SA について
教育支援センター　TA・SA担当

③ 第4回新任教員対象 FD 研修会
日　時：2021年11月17日（水）15:00～16:30
参加者：18名
内　容：**「発達障害と精神障害の理解について」**
保健管理センター長 産業医・学校医
江花 昭一
「合理的配慮について」
教育支援センター課長　升田 亘

（2）FD 研修会

④ 第1回（新任教員第3回）FD 研修会
日　時：2021年9月29日（水）15:30～17:20
出席者：65名（専任教員46名（内新任教員18名）、非常勤講師9名、職員10名
挨　拶：遠隔授業対策本部長　山口 和夫（副学長）
内　容：**「遠隔授業・ハイフレックス型授業に関する調査アンケート実施報告」**
遠隔授業対策本部　教育支援センター所長
髙城　玲
「教育改善のための学生による授業アンケートの実施報告と活用」
教育支援センター　佐野 恭平
「コロナ禍においてメンタル面に不調を抱える学生の現状と対応」
人間科学部 特任准教授（精神科専門医・臨床心理士・公認心理師）　櫻小路 岳文

⑤ 第2回 FD 研修会
日　時：2021年12月1日（水）13:30～14:45
出席者：80名
テーマ：オンデマンド授業を理解する
挨　拶：遠隔授業対策本部長　山口 和夫（副学長）
内　容：**「予習動画とレジュメの提供＋オンタイム収録＋授業動画の公開と復習テストの提供」**
教育支援センター副所長　中村 壽宏
「オンライン・オンデマンド授業で扱うツール紹介―反省と要望を添えて」
理学部准教授　東海林 竜也

（3）第7回　ヨコハマ FD フォーラム

日　時：2021年12月4日（土）13:00～16:30
共　催：横浜4大学（横浜国立大学・横浜市立大学・関東学院大学・神奈川大学）
テーマ：「大学における教養教育を、今一度、考える」
～学生とともに考えるウィズ&
ポストコロナ時代の大学教育～
参加者：115名（学生・教員・職員等）
【第一部】教職員と学生による実践報告
―横浜4大学の教養教育の現状と今後の展望―
【第二部】意見交換会（ブレイクアウトセッション）
＊詳細につきましては、8頁を参照

5. 学生のFD活動参加

(1) 第7回　ヨコハマFDフォーラム

日　時：2021年12月4日(土) 13:00～16:30

参加者：学生1名［登壇者：理学部生物科学科3年］

(2) 神大トークセッション2021

日　時：2021年12月13日(月) 17:30～19:30

主　催：学生UD委員会

テーマ：神大トーーーク交流会
―他学部・他学年の人とつながろう！―

参加者：学生11名

(3) 学生FDサミット2021 学生FDオンライン交流会
Start over again ～学生FDの「再興」～

日　時：2021年12月18日(土) 13:00～17:00
2021年12月19日(日) 13:00～17:00

主　催：広島経済大学興動館学生

参加者：2名(学生UD委員会)

6. 他大学とのFD連携

「第7回　ヨコハマFDフォーラム」を横浜4大学で共同主催した(4.(3)参照)

その他、全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)、FDフォーラム(コンソーシアム京都)、FDネットワークつばさ協議会、大学教育研究フォーラム(京都大学)等に参加

Ⅱ. 学生支援活動

1. 学習相談

［横浜］文章表現　45件(12人)、数学　59件(30人)、英語　208件(19人)

［平塚］文章表現　33件(5人)、数学　44件(9人)、英語　16件(4人)

［みなとみらい］文章表現　16件(3人)、数学　13件(2人)、英語　48件(6人)

＊(　) 内は実質学生数

2. 新入生なんでも相談窓口アスカウンター開設

学生UD委員会主催による新入生相談窓口

日　時：2021年4月2日(金)～4月9日(金)※土日を除く

主　催：学生UD(University Development)委員会

相談者数：〔横浜〕240名、〔平塚〕94名
〔みなとみらい〕103名

学生スタッフ：〔横浜〕30名、〔平塚〕15名、
〔みなとみらい〕19名

3. 障がいのある学生への支援

(1) 授業時における配慮の件数

【3キャンパス合計】

教育的配慮依頼申請者数　前学期　46名(昨年度実績 35名)
後学期　43名(昨年度実績 32名)

(2) 新任教員対象FD研修会を実施

「発達障害と精神障害の理解について」「合理的配慮について」をテーマに、新任教員対象FD研修会を実施した(Ⅰ. 4.(1).③参照)

(3) 聴覚障がいのある学生に対しての授業サポート

聴覚障がいのある学生に対して、授業サポーターによる音声認識アプリ「UDトーク」を活用した教育支援を実施した。

支援学生　1名、授業サポーター　延べ11名

FDニュースレターへの寄稿をお願いします

本ニュースレターは、FD活動に対する啓発を促進するため、学部・研究科FD委員会及び個々の教職員の教育改善や教育支援に対する取組事例を紹介し、本学FDの定義にある「教員の自主的・自律的な日常的教育改善を支援すること」を目的としています。教育改善（支援）に関する研究及び問題提起、授業におけるユニークな実践事例など教育職員、事務職員等を問わず、皆様からのご寄稿を募集しています。

【内　　容】FD（ファカルティ・ディベロップメント）、SD（スタッフ・ディベロップメント）に関するもの
【字　　数】1,000～2,000字（応相談）　【写 真 等】掲載可（応相談）
【提 出 先】FD・学生支援推進委員会（事務局：教育支援センター）内線2160、2166
e-mail：kanagawa-fd@kanagawa-u.ac.jp

2021年度FD・学生支援推進委員会委員

〔委 員〕
委員長　髙城　玲、副委員長　中村　壽宏、副委員長・工学部　石井　信明、法学部　井上　匡子、経済学部　森田　圭亮、経営学部　嶋谷　誠司、外国語学部　新木　秀和、国際日本学部　大島　希巳江、人間科学部　衣笠　竜太、理学部　川東　健、学修進路支援委員会　岩畑　貴弘、学生生活支援委員会　馬谷　誠二、メディア教育・情報システム委員会　村山　宏幸、入試管理委員会　長澤　倫康、大学院学務委員会　篠森　大輔、共通教養教育センター運営委員会　村井　寛志、法学部　小山　竜司、教育支援センター事務部次長　梅香家　睦子（以上18名）

〔オブザーバー〕
学長室　是友　めぐみ、教務部　能重　幸夫、学生生活支援部　高橋　厚、情報システム推進部　村山　宏幸、入試センター　吉岡　誠、経営政策部　西川　朋実（以上6名）

〔事務局：教育支援センター〕
升田　亘、天利　百合、佐野　恭平、楢山　翔太、山口　諒、堀江　美奈子、平尾　勇輝（以上7名）

ご意見、ご質問等がございましたら、お気軽にお寄せください。　E-mail　kanagawa-fd@kanagawa-u.ac.jp

KU 神奈川大学　編集・発行 / 神奈川大学　FD・学生支援推進委員会

〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1　TEL.045-481-5661(代)
〒259-1293 神奈川県平塚市土屋2946　TEL.0463-59-4111(代)
〒220-8739 神奈川県横浜市西区みなとみらい4-5-3　TEL.045-664-3710(代)

https://www.kanagawa-u.ac.jp/

発行日：2022年3月31日